

エディトリアル

六ヶ所村地域家庭医療センター センター長 松岡史彦

今回『月刊地域医学』で、青森県の地域医療の現状と将来について特集が組まれたことに感謝している。1期生から始まった自治医科大学・青森県卒業生の実直で多様性に富んだ波乱万丈な旅の成果を誌面に残し、読者にお届けできるからである。

1972年に自治医科大学が設立され、1期生が1978年に出身県に戻り、全く予備知識も経験もなまま医師としてのキャリアを始めてから46年経ったが、地域医療を担う医師の育成やへき地医療をシステムとして捉えるあり方に一定の型ができたのはごく最近である。

この特集は医療計画にあるへき地医療事業を縦軸とし、へき地医療のシステムを構成する医療施設とその役割を担う卒業生の立場から現状と将来について執筆いただいた。へき地を支える救急医療と医学教育についても県内卒業生に依頼した。何よりこの長い旅路を見つめてきた1期生の森明彦先生に執筆いただいたことは個人的に大変感慨深い。

県立中央病院の丸山博之医師は自治医大卒業生の人事を統括するとともに、へき地医療に従事する医師とその地域を育成するという大きな役割を担う。へき地医療の成立要件と今後の人口減少を見据えた将来像が提示されている。

八戸市立市民病院の今明秀医師は、全国的に有名な救急医療を立ち上げ機能向上や医師確保に成功した。これにより近隣の病院支援や入院受け入れの他、ドクターヘリやドクターカーでへき地救急医療の質を劇的に改善した。

大間病院は厳しい地理的な条件から基本的に義務年限の卒業生だけで運用されるようになった。安齋遥医師より医療環境や子育てを含めた現状の報告と、看護師不足への対策、ICTの活用など先進的な取り組みが述べられている。

三戸中央病院の葛西智徳医師は田子病院の診療所化と三戸中央病院との連携に尽力された。現在は三戸中央病院の院長としてへき地医療拠点病院の運営を担っている。連携までの経緯や看護師不足の現状等を報告いただいた。

東通診療所の川原田恒医師に地域医療振興協会の診療所として開設した経緯から現況まで報告いただいた。地方自治体の診療所との違いや総合医教育、包括ケア、さらに地域を挙げて行う健康教育や県外からの支援など、地域医療のお手本となる活動が展開されている。

自治体の運営するへき地診療は深浦診療所の吉岡秀樹医師に報告いただいた。深浦診療所の沿革や困難の要因を論述している。へき地医療を個人に頼らないために外交官の人事システムを参考にするなど、外務省医務官としての経験が生かされた興味深い論文である。

森総合クリニック院長の森明彦医師は卒業後の経験や開業医から見た地域医療の問題点ならびに早期発見の重要性と病診連携の必要性を述べている。常に地域住民を基盤にする有り様は後輩たちに受け継がれている。

弘前大学の米田博輝医師は、現状の医療状況を俯瞰しつつ地域を基盤にした医師教育の重要性を述べている。総合診療医教育、自治医大卒業生と弘前大学医学生の交流が地域医療に変化をもたらしていること、地域での研究の重要性や今後の展開が述べられている。